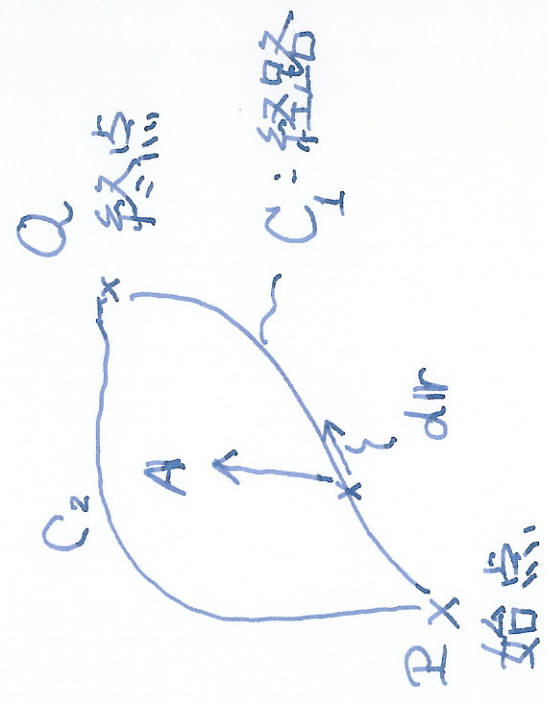


前々回, 前回の話.

線積分. $\int_C \mathbf{A} \cdot d\mathbf{r}$ ベクトル \mathbf{A} がある始点から終点まで経路に沿って積分する



$$\int_{C_1} \mathbf{A} \cdot d\mathbf{r} \neq \int_{C_2} \mathbf{A} \cdot d\mathbf{r}$$

★ 線積分は経路が異なると結果

が変わる

★ ただし $\mathbf{A} = \nabla f$ \mathbf{A} がスカラー関数 f の勾配で

書けるとき.

$$\int_C \mathbf{A} \cdot d\mathbf{r} = \int_C \nabla f \cdot d\mathbf{r} = \int_p^q df = \frac{f(q) - f(p)}{\quad}$$

$\left\{ \begin{array}{l} \text{始点における } f \text{ と終点にお} \\ \text{ける } f \text{ との差} \\ \text{経路によらない.} \end{array} \right.$

今日の話 . . . 前々回, 前回の話を力学に適用する

$$A: \text{ベクトル} \longrightarrow F: \text{力}$$

$$\int_C A \cdot dr \longrightarrow \int_C F \cdot dr: \text{仕事}$$

$$A = \nabla f \longrightarrow F = -\nabla U$$

U: ポテンシャル (位置エネルギー)

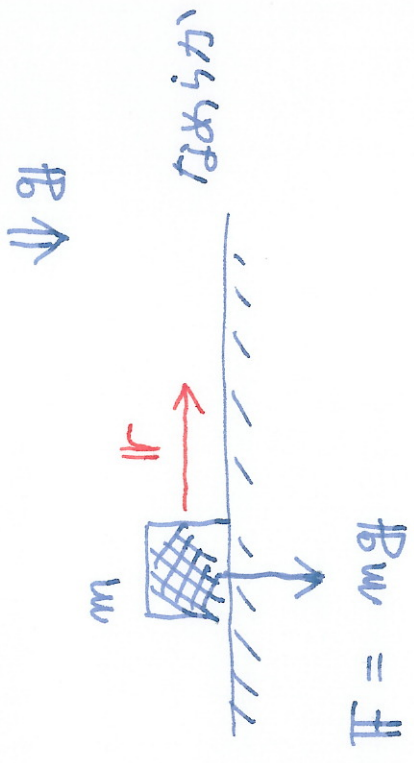
エネルギー保存則を運動方程式から導く.

第10章 エネルギー保存則

10.1 仕事

10.1.1 定義

ある一定の力 F の作用のもと, 物体が \mathcal{R} だけ動いたとき, $W \equiv \int_C F \cdot dr$ を力が物体にした仕事と定義する. ↑ 内積

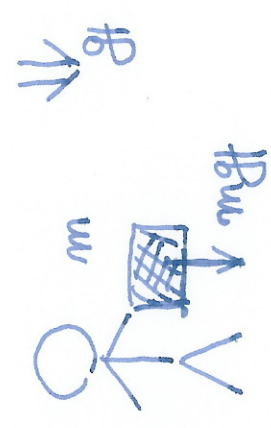


力と物体の移動の方向が垂直のとき.

$F \perp dr$
 $W = 0$

物体は移動していない.

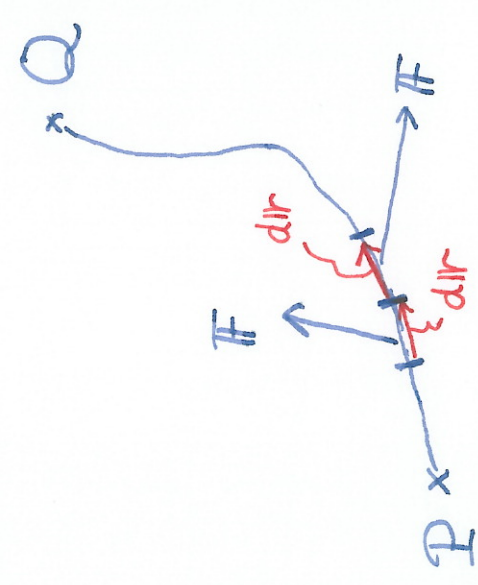
$|dr| = 0$
 $W = 0$



一般化 力 F が、時間・空間に依存した関数 $F(x, y, z, t)$ 場合に、物体が始点 P から終点 Q まで、ある経路 C に沿って移動したとする.

$$W \equiv \int_C F \cdot dr$$

F の C に沿う線積分で F が物体にした仕事を表わせる.



10.1.2 仕事の次元, 単位.

4/8

定義によると

$$W = \mathbb{F} \cdot \mathbb{R}$$

$$[W] = [F] \cdot [L]$$

力 長さ

$$= (M L / T^2) \cdot L = M (L / T)^2$$

= (質量) (速度)²

$$\frac{1}{2} m v^2$$

運動エネルギー

仕事の次元 ... エネルギーの次元と同じ

MKS 単位 $\text{kg} (\text{m/s})^2 \equiv \underline{\underline{J}}$ (ジュール)

10.2 運動方程式の(線)積分.

運動方程式

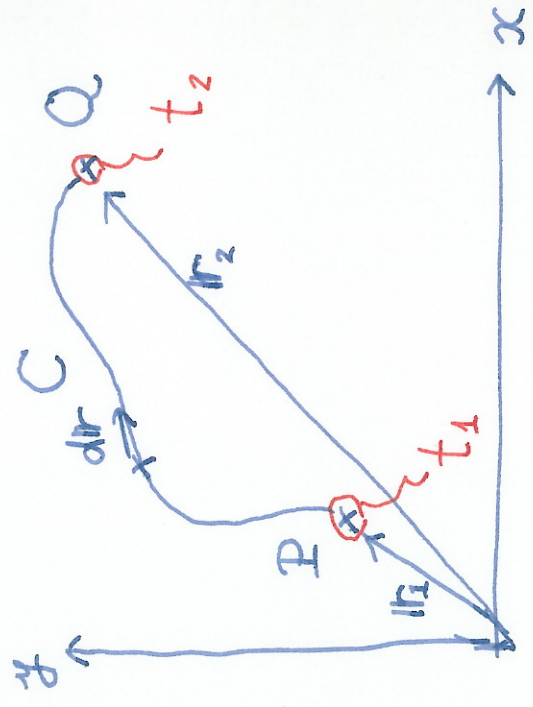
$$m \frac{d^2 \mathbb{R}}{dt^2} = \mathbb{F} \quad \dots (10.5)$$

(10.5) を 始点 P (位置ベクトル \mathbb{R}_1) から 終点 Q (位置ベクトル \mathbb{R}_2)

まで, ある経路 C に沿って線積分する.

$$\int_C m \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} \cdot d\mathbf{r} = \int_C F \cdot d\mathbf{r} \quad \dots (10.6)$$

Fが物体にした仕事 W



\mathbf{r} : 位置ベクトル, t の関数 $\mathbf{r}(t)$.

$$\int \dots \frac{d\mathbf{r}}{dt} dt = \int \dots dt$$

↑
 \mathbf{r} について
 の積分
 ↑
 t について
 の積分
 変数変換.

$$\frac{d\mathbf{r}}{dt} = \frac{d\mathbf{r}}{dt} dt$$

$\mathbf{v} = \frac{d\mathbf{r}}{dt}$: 速度

(10.6) の左辺

$$\int_C m \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} \cdot d\mathbf{r} = \int_C m \frac{d\mathbf{v}}{dt} \cdot \mathbf{v} dt$$

さらに $\frac{d\mathbf{v}}{dt} \cdot \mathbf{v}$ の変形を計算.

$$\frac{d}{dt}(v \cdot v) \stackrel{\uparrow}{=} \frac{dv}{dt} \cdot v + v \cdot \frac{dv}{dt} = \frac{dv}{dt} \cdot v + \frac{dv}{dt} \cdot v$$

連鎖律

↑
内積は
可換

$$= 2 \frac{dv}{dt} \cdot v$$

$$\frac{dv}{dt} \cdot v = \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} v \cdot v \right)$$

$$\left\{ (10.6) \text{ の左辺 } \right\} = \int_C \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} m v \cdot v \right) dt$$

$$= \int d \left(\frac{1}{2} m v \cdot v \right)$$

$$= \left[\frac{1}{2} m v \cdot v \right]_{t_1}^{t_2}$$

$$= T(t_2) - T(t_1)$$

始点における運動エネルギー
と終点における運動エネルギーの差

v^2 と書く.

$$\frac{1}{2} m v \cdot v \equiv T(t)$$

↓
運動エネルギー

運動の激しさを表す
す示標の1つ

以上まとめると

運動方程式を線積分すると

7/8

$$T(t_2) - T(t_1) = W \dots (10.10) \text{ に対応する式}$$

「力が物体に仕事をするとどの分だけ運動エネルギーが変化する。」

10.3 エネルギー保存則

もし力 F が次のような関係を満たす場合

$$F = -\nabla U \dots (10.11)$$

Uで表わされるポテンシャルの坂を下る方向を向いている。

このような力を保存力と呼んだり

ポテンシャルから導びかれる力と呼んだりする。

$$U(x, y, z) \text{ スカラー関数でポテンシャルと呼びかけている}$$

位置だけの \rightarrow 高校のときは位置エネルギーと呼んでいた。

8/8
 $(\nabla f$ で表わされる地形の傾き (勾配) で坂を上る方向を向く ベクトル

保存力が働いている場合 (10.6) の右辺は次のように変形できる。

$$\begin{aligned} \int_C \mathbf{F} \cdot d\mathbf{r} &= \int_C -\nabla U \cdot d\mathbf{r} = - \int_C dU \\ &= - [U]_{(x_1, y_1, z_1)}^{(x_2, y_2, z_2)} \\ &= - U(x_2, y_2, z_2) + U(x_1, y_1, z_1) \end{aligned}$$

始点における U と終点における U の差。

(10.10)に戻ると

$$T(t_2) - T(t_1) = -U(x_2, y_2, z_2) + U(x_1, y_1, z_1)$$

$$T(t_2) + U(x_2, y_2, z_2) = T(t_1) + U(x_1, y_1, z_1) \quad \dots (10.13)$$

力学的エネルギー

$T+U$: 運動エネルギーとポテンシャルの和

(10.13)は (始点における力学的エネルギー) = (終点における力学的エネルギー) を述べており, 力学的エネルギーは運動の拘束条件に依らずに (力学的エネルギー保存則) を述べている。